



TITLE:

地理教材としての地形圖(四)

AUTHOR(S):

小牧

CITATION:

小牧. 地理教材としての地形圖(四). 地球 1924, 2(5): 605-608

ISSUE DATE:

1924-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182768>

RIGHT:

地理教材としての地形圖(四)

四、河北潟附近

河北潟附近の地形は二十萬分一帝國圖金澤、七尾の兩圖幅を參照すれば大體の概念を得る事が出来るが、更に詳しく知らうとすれば五萬分一地形圖津幡^{七尾八號}金澤^{金澤五號}の兩圖幅を參照しなければならぬ。此れで稍詳しく知る事が出来るが、幸此附近は假製版ではあるが二萬分一の地形圖が出来て居るから之れを參照すべきである。二萬分一地形圖では金澤近傍二十五枚の内津幡^{十竹橋號}白尾^{十五號}大野^{十六號}金澤^{十七號}上金石^{二十號}の六圖幅を參照すればよい。

河北潟の東岸平坦たる田野を隔て、金澤より東北に走る北陸本線、津幡より分岐して西北に走る七尾線の東方に連互する一帯の丘陵は之に産する化石によつて代表せられる第三紀層よ

りなり、此の丘陵西邊の一部即ち金澤市街の南部、南東部、津幡北部の第三紀層の西邊等は洪積層よりなり此の第三紀層丘陵の一角卯辰山と淺野川を隔て相對する洪積層臺地に築かれた。金澤城の城址から遙かに見渡される一帯の田野、夏は青毛氈を敷いた如く秋は黄金の波打つ殆んど水平の廣大な平野は犀川、淺野川、森下川、津幡川等大小數多の河川の運搬して來た沈積物の堆積によつて成つた豐沃な沖積層であり、此の平野の西北舊藩時代金澤城下風流人士の遊覽地であつて蓮湖或は大清水の異名を冠せられた河北潟の漣波を隔て南西より北東に連り西北日本海の怒濤を劃する一條の丘陵は主に手取川犀川等から流出せられた多量の細砂が南西より北東に流れる沿岸海流や同じく南西より北東に卓越する瀬海流のため次第に東北に漂流せられ、海

面下に砂堤を作り、元來日本海の一部分であつた河北潟と日本海とを割し更に此砂堤が風波の作用を受けて海面上に現れ、其の上の細砂が風に吹き上げられて出来た堤洲上の砂丘である。

地質構造は大體右の通りであるが之を垂直的地形上より見れば第三紀層の丘陵と洪積層の高臺と沖積層の平原と海の遺跡たる潟と風生の沙丘と外海との對照は地質構造上の對照と同様に明瞭である。即ち東邊の第三紀層は加越能三州の國境上に聳立する三國山に於て標高三三三米を超えず大抵の所は二〇〇米以下の低平な丘陵であるが、其れでも此れが最も高い最上段で、洪積層高臺地は其の下段をなし、沖積層は更に明割に、其れより低く水平に横はり、潟の底部は尙其れよりも二米ばかり低く、其れが潟縁の砂丘基部で徐々に高まり遂に最高五十米ばかりに達し、再び下降して海底に接續して居るのである。水平的地形は地圖を一見すれば餘りに明瞭であるから省略する。

以上は河北潟附近の地質地貌の一般に就て述

べたのであるが、次に二萬分一地形圖津幡、竹橋、白尾、大野、金澤、上金石の六圖幅中に窺はれる幾多の事實の内、自然地理人文地理學上最も興味ある二三の事實を指摘する事としやう。

先づ第一に第三紀丘陵中に見る著しい事實は人工的溜池の非常に多い事である。御門池、加茂池等を初めとし有名無名大小數多の溜池が存する。之れは此の第三紀層を形成する砂岩、頁岩、粘土、凝灰岩等の内で頁岩粘土等は其の質が緻密であつて水の滲透を防ぐに充分であるから、丘陵の流水に浸蝕彫刻せられた凹地、例へば細やかな川の谷間や、山の鼻と鼻との間の凹地や、主に三方傾斜面に圍まれ一方が低くなつて居る様な地形の所に、三方の傾斜面を利用して残る一方には人工で築堤して灌漑用の貯水池と化したものである。

次に洪積層高臺に降つて最も著しい事實は金澤と云ふ割合に大きな都市が此の高臺上に發達して居る事實である。この地が早く石器時代住

民によつて聚落せられた事は其の遺物遺跡によつても知れるが、其の早くより聚落地として榮えた所以は一に其の地が洪積層の高臺上にある、瘴癘の氣なく、加之犀川淺野川の兩川に擁せられ、飲料水其の他の水利がよく、原始人に取つて好個の住心地よき居住地としての條件を具備して居た點に歸せねばならぬ。其れが築城術の發達と共に城廓地として要害の位置を占めて居る事が認められ、金澤城の築城後前田百萬石の策源地となり茲に城下町が發達して維新に至つたのであつて、其の發達は地質地勢と密接の關係がある事を認めなければならぬ。

次に平原上に於ては津幡が北陸道と七尾街道との分歧集合點として、大野と金石とが各大野川犀川の河口港として、金澤には到底及ぶべくもないが、兎に角小都市として發達した事、金澤より津幡に至る北陸道、津幡より七尾に至る七尾街道に沿つて稍明瞭に街村の（*Massendorf*）の發達して居る事、津幡の西南渦端新の地名は明かに舊藩時代新田の開拓と關係あるものである

が渦端新によつて代表せられる新田開發に伴ふ近世の聚落が渦の沿岸に數多く散在して居る事等人文地理上の著しい事實と共に、自然地理上の著しい事實として、淺野川、森下川、宇ノ氣川等が河北渦に注入する河口附近には小規模ながら兎に角美しい形の三角洲が發達して居る事實に注意しなければならぬ。手取川や犀川等可なり的大河が日本海に注入する河口には何等三角洲らしきものゝ發達して居ないのに反して淺野川以下の比較的小さな河口に特に三角洲の發達したのは一に外海は潮流や海流の外、冬季特に暴威を逞しうする波浪によつて起る瀕海流が河川の河口附近に於ける物質の堆積を許さぬに對して渦の内面は渦水平靜であつて河川の運搬物堆積を遮げぬからである。

次に砂丘地に於て注意すべき事は第一に其の高度が最高五十三米にも及ぶ事である。自分の知れる範圍内ではかゝる大なる高度を有する砂丘が日本の他の地方に存する事を知らぬ。之れは鳥取地方細川の大砂丘と共に日本最高の砂丘

で高度に於ては有名な獨乙クルの砂丘に匹敵するものである。而して其の地形は非常に複雑で之れが横斷の斷面圖を作つて見ると大體向風側は十度風下側は三十度の傾斜を有するけれども、之れは概略の話して局部的には決して左様に簡單ではなく圖に針葉樹の記號や雜草の記號で示されて居る様に松や砂丘植物の僅かに生存する所では勿論其の他の所でも凸凹が甚だしく、一丘あるかと思へば一窪あり非常に複雑である。圖に矢の記號を附した地點は其の外側の等高線の所より低く凹んで居る事を示して居る、即ちこれは石灰岩地方のドリーネ上の矢の記號と同様の意味を有するものである。以上は自然地理上注意すべき點であるが人文地理上より見ても興味ある事實が少くない。内灘村の砂丘は他の砂丘とは特別に高く從て向風側に於て海風の影響を受ける事が甚だしく又砂丘上に於ける飛砂の移動も甚だしいから其の北方七塚村の白尾、外日角、秋濱、濱北の諸聚落が何れも外海に而して位置して居るに拘らず、内灘村砂

丘の諸聚落大野町、五郎島、粟崎、向粟崎、大根布、宮坂、黒津船、西荒屋、室、大崎、内日角等が何れも砂丘風下側潟に面して位置し、其れかと云つて猫額大の耕地に満足し得ず又潟の淡水魚のみに満足し得ず海に乗り出す便利のため砂丘向風側に漁具納屋を存し砂丘を越して之れに通ずる細路が點線で示されて居る等は最も注意すべき興味ある事實である。(小牧)

ノールウエーの首都の改名

一九二五年よりノールウエーの首府クリスチアニアはオスロ^{Oslo}と改名されるさうである。オスロは一〇五四以來一六二四年までのクリスチアニアの舊名であつて、其の位置は今の首府の東方ビエルグイケン灣を隔てた處にあつた。クリスチアニアは丁抹のクリスチアン四世の創設したものでありつたが、自己民族の力に月ざめたノールウエーは假令瑞典の羈絆を脱した時に丁抹から國王を招ひたゞは云へ昔の自國他名を再び採用することになつたのである。